# 今月の視点-141

# 「共通テスト」問題作成の方向性

外検「成績提供システム」は全入試で利用可能に!

旺文社 教育情報センター 2018年9月

大学入試センターは 6 月、「『大学入学共通テスト』における問題作成の方向性等と本年 11 月に実施する試行調査(プレテスト)の趣旨について」を公表した。これは 11 月に行われる 2 回目の試行調査と共通テストの問題作成の方向性を示したもの。1 回目の試行調査の結果分析を踏まえ、新たな内容も盛り込まれている。入試改革の情報としては、3 月の外部検定に関するもの(いわゆる認定試験や新 CEFR)以来の大きな発表だ。

また、文科省からは共通テスト「実施方針(追加分)」が8月に発表された。こちらは外部検定に関する「高3で2回まで」ルールの例外を新たに示している。

ここでは「問題作成の方向性」を中心に、「実施方針(追加分)」の内容もあわせて見ていこう。

※本記事では基本的に、新たに判明した情報、あるいは進展のあった情報を中心に記載。原則、これまで公表されたものと変わらない情報は割愛。

# 全体

## (各科目の問題作成の方向性は本記事の最後に記載)

- ・既卒生用の問題は作成しない。
- ・大学に提供する成績は、科目別の段階別評価(9段階程度)も検討。

#### 

注目は科目別の段階別評価だ。1点刻みの選抜からの脱却は、入試改革の構想当初から言われてきたことだが、いよいよ現実味を帯びてきた。これが実装されるとなると、大学の合 否判定に大きな影響を与える。

この段階別評価は、受験者の得点分布から算出したもの。各科目で平均点や得点分布が異なれば、同じ得点でも評価は異なる。9段階なのは、いわゆる「スタナイン(テストの得点分布を9つに分ける区分方法)」の適用を想定しているためだ。

これにより何が起きるのか。次の例をみてほしい。

#### ●想定される合否判定の変化<例>

【現状】総合点の上位者から合否を判定。

⇒【今後】合格者の 6 割は従来どおりに判定。 残り 4 割は、段階別評価が全科目「6」以上の者を抽出して判定。 例で示した 4 割のゾーンは、大学からすればバランスの取れた受験生を確保することができる。一方、受験生にとっては不得意科目を得意科目でカバーすることはできない。

科目別の段階別評価は「参考情報」ということで、合否判定の中心は現状どおり素点だ。 段階別評価の扱いは、当初は様子見の大学が多いだろう。しかしのちのち合否判定が大学ご とに超多様化する可能性も含んでいる。

# 外部検定

- ・外部検定の成績を一元管理するために、入試センターは受験生個人に ID を発行。
- ・受験生はこの ID を使って検定を受検。
- ・大学は「大学入試成績提供システム」を、独自入試、学校推薦型選抜、総合型選抜でも利用可能に。

# ●「高3で2回までルール」の例外

# ※本項目のみ文科省「実施方針(追加分)」(8月発表)の内容

昨年7月発表の「実施方針」では、成績提供システムに受験生が登録できる外部検定(いわゆる認定試験)の成績は「高校3年生の4月~12月までに受検した2回まで」とされた。今回、追加分として示されたのはその例外だ。

#### ●「高3で2回まで」ルールの例外

- ・既卒生 ⇒ 前年度の成績も可(大学判断)。
- ・高 2 で CEFR B2( $\Rightarrow$  英検準 1 級)取得者で「経済的に困難」または「離島・へき地に居住または通学」 $\Rightarrow$  高 2 の成績も可。
- 特別に配慮すべきとされた者(病気等) ⇒ 前年度の成績も可。
- ・海外在住者 ⇒ 海外で受検した認定試験の成績も可。
- ・障害のある受験生 ⇒ 大学は不利益が生じないように取り扱う。

の年内スタート、そのための申請案内はさらに早い時期、といったところか。

## 

外部検定の成績は、成績提供システムで一元管理していく。これまで不明だった各情報 (テストの成績等) の個人への紐付けは ID によって管理することとなった。例えば 2 回受けた外部検定の成績や、共通テストの成績などは ID をとおして受験生個人を特定していく。 今後気になるのは、ID の申請方法と時期だ。成績提供システムは、高 3 の 4 月の検定から利用可能になる。その受検申込のためには 2 月には ID がほしい。そうなると申請は高 2

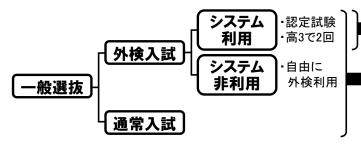
## ■■ 解説② 成績提供システムの利用範囲 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

大学が成績提供システムをすべての入試で利用できることになった点は非常に大きい。 これまでは「成績提供システム=共通テストのシステム」という認識が一般的だった。

ほかの入試でも利用されるとなると、成績提供システムのルール、いわゆる「認定試験」 と、「高3で2回まで」の縛りが大学入試全体に広がっていくことになる。

そもそも外部検定利用入試の実施自体が大学判断だが、実施するとしてもシステムの利用は大学による。システムを利用しなければこのルールは関係ないが、それでもシステム利用が大半になろう。入試業務の負荷が大幅に軽減されるからだ。

# ●一般選抜はこうなる?(予測)



## ■■■旺文社予測■■■

【国立大】外検必須でシステム利用。 【公立大】国立大に準じる。

## 【私立大】

- ・通常入試…メイン。
- ・外検シス利用…少人数枠で激増。
- ・外検シス非利用…一部の大学で。

※国立大の「外検必須」は、国大協方針。 各国立大の対応は今後明らかになる。

# 記述式

- ・国語、数学 I でそれぞれ 3 問出題。
- ・正答の条件、段階別評価の基準は、試験実施後に速やかに公表。
- ・採点は民間に委託 (センターが行う)。

#### ●国語

- ・解答文字数「20~30字」「40~50字」「80~120字」程度を各1題。
- ・記述式3題で大問1問を構成。
- ・実用的な文章、論理的な文章、あるいは両方を組み合わせた題材。
- 「テキストの内容や構造を把握して解釈」、「要旨を端的に記述」することを問う。
- ・試験時間は80分→100分に延長。
- ・成績は段階別で、小問はそれぞれ4段階。大問(総合評価)は5段階。
- ・大問の成績では、「80~120 文字」の小問は 1.5 倍の重み付けをして扱う。
- ・マス目の使い方など、記述に際しての留意点を受験者に示す予定。
- ・表記の誤りなどの扱いは今後決定。正答の判断は内容面を主とする方向で検討。

# ●数学

- ・マーク式と混在で小問3問。
- 「数式を記述」、「問題解決の方略を短い文章で記述」する問題を出題。
- ・試験時間は 60 分→70 分に延長 (数学 I 、数学 I A)。
- 成績は素点。

#### 

国語と数学の満点を現状ママとした場合(配点は未公表)、国語の成績は「マーク式=200点」&「記述式=段階別」ということになる。数学の記述式は素点ということだが、それが100点の内か外かは言及されていない。おそらく前者の「マーク&記述式=100点」だろう。

ただしそうなると、必然的に数学の記述式は必答になる。入試で記述式を課すか否かの検 討を行ってきた大学も多いはずだが、数学については、そもそもこの検討はムダになる可能 性が出てきた。

# 

国語の記述式について、採点の流れをシミュレーションしてみよう。

※以下の各表は 2017 年 11 月の試行調査「国語」第 1 問(記述式)問 3 について、大学入試センター発表資料をもとに旺文社が作成。すべて検討段階のイメージ。旺文社による加筆等が大きくなされている箇所もある。

【正答例】確かに、部活動の終了時間の延長の要望は多く、市内に延長を認める高校も多い ことから、延長を提案することは妥当である。しかし、通学路は道幅も狭い上に午後六時前後の 交通量が特に多いため、安全確保に問題があり、延長は認められにくいのではないか。

# <小問の採点①> 正答の条件

正答の条件								
1	80字以上、120字以内で書かれていること。							
2	2文	2文で書かれていること。						
3	1文目が「確かに」という書き出しで書かれており、かつ、それに続く文脈において、次の3つの内容がすべて書かれていること。							
	i)	「部活動(の終了)時間の延長の要望が多い」ということ。						
	ii)	「(市内に)部活動(の終了)時間の延長を認める高校も多い」ということ。						
	iii)	部活動(の終了)時間の延長を「提案することは妥当である」ということ。						
4	「し; 容か							
	i)	「(通学路の)安全確保に問題がある」ということ、「通学路は道幅も狭い上に午後 六時前後の交通量が特に多い」ということのどちらかが書かれていること。 なお、両方書かれていてもよい。						
	ii)	部活動(の終了)時間の「延長は認められにくい」ということ。						

※ 試行調査 自己採点用紙をもとに旺文社が作成。入試センターによる結果報告書では、本表よりもさらに細かい正答の条件が設定され、評価のシミュレーションがなされている。

採点には、正答となるため の要素(正答の条件)が示 され、解答の一致状況をチ ェックする。



# <小問の採点②> 解答類型/小問の段階別評価

解答類型	段階別評価
条件をすべて満たしている。 ・条件①~④=すべて〇	а
内容的な条件をすべて満たしているが、形式的な条件を一部しか満たしていない。         ・条件①、③、④=○ (②のみ=×)         または         ・条件②、③、④=○ (①のみ=×)         内容的な条件をすべて満たしているが、形式的な条件をすべて満たしていない。         ・条件③、④=○ (①、②=×)	b
内容的な条件の半数以上を満たしている。(形式的な条件を満たしているかは問わない)         ・条件①、②、③=〇 (④のみ=×)         または         ・条件①、③=〇 (②、④=×)         または         ・条件①、③=〇 (②、④=×)         または         (以下、省略)	С
形式的な条件をすべて満たしているが、内容的な条件をすべて満たしていない。  「・条件①、②=〇 (③、④=×)  形式的な条件を一部を満たしているが、内容的な条件をすべて満たしていない。 ・条件①のみ=〇 (②、③、④=×)  または ・条件②のみ=〇 (①、③、④=×)  正答の条件を1つも満たしていない。 上記以外の解答  無解答	е

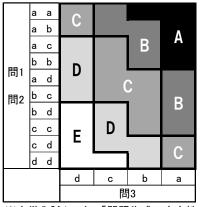
「正答の条件」との一致パタ ーン (解答類型) により、小 問別の段階別評価を判定。

小問の評価が確定(4段階)。

※ 試行調査 自己採点用紙および結果報告をもとに旺文社が作成。 ※ あくまでイメージであり、前ページの表の内容とは厳密には対応していない。



# <大問の採点> 大問の段階別評価



小問の評価を総合し、大問を評価 (総合評価)。 問3は1.5倍のウエイト。

大問の評価が確定(5段階)。

「問1(文字数=少)、問2(=中)」と「問3(=多)」の a~d 評価を組み合わせた大問の評価 A~E は左表のよう になる(A~Eの分布はイメージで検討段階)。

※大学入試センター「問題作成の方向性」 (2018年6月)より。

# 【検証】なぜ A~E は上記の分布になるのか

		-				
	3	3	6	7.5	9	10.5
	3	2	5	6.5	8	9.5
	3	1	4	5.5	7	8.5
884	2	2	4	5.5	7	8.5
問1	3	0	3	4.5	9	7.5
問2	2	1	3	4.5	6	7.5
1. 3-	2	0	2	3.5	5	6.5
	1	1	2	3.5	5	6.5
	1	0	1	2.5	. 4	5.5
	0	0	0	1.5	3	4.5
			0	1.5	3	4.5
	問3					

各評価に仮の数値を当てはめてみた。 a=3/b=2/c=1/d=0 (問3は1.5倍)

その結果が左表。

 $8.5 \sim 10.5 = A/6.5 \sim 8 = B/4.5 \sim 6 = C$  $/2.5\sim4=D/0\sim2=E$ 

だとすると、確かに上表の分布になる。

# マーク式問題の新たな解答形式

・当てはまる選択肢をすべて選択する問題、前問と連動して正答の組み合わせが複数ある問題などを検討。来年度初頭に実施の有無を公表。

# 

「当てはまる選択肢をすべて選択する問題」は、実は採点面で課題を抱えている。それは「消し跡」の判断だ。消しゴムで消したのか、マークが薄いのか。それをどう判断するのか。 現在は解答が 1 つのため、入試センターではかなり薄いマークも読み取りつつ、より濃いマークを解答として判断しているという。この解決がポイントになろう。

# 本年 11 月の試行調査

- ・平均得点率(平均正答率)は5割程度をめざす。
- 大学を会場。
- ・結果は本年度中の公表予定。
- ・次の科目は実施しない。⇒ 数学の IA、IIB 以外/地歴 A 科目/倫政経/独仏中韓。
- ・そのうち以下のものは、問題例等を公表予定。
  - ◎世界史 A、日本史 A、地理 A … 【本年度中】問題例。
  - ◎簿記・会計/情報関係基礎/独仏中韓
    - … 【来年度初頭】問題作成のねらいや実施方法等。

# 今後のスケジュール

【2019 年度初頭】「共通テスト実施大綱」/各科目の出題のねらい・実施方法等 【2020 年度初頭】「共通テスト実施要項」

- ・検定料は2019年度中に決定。
- ・新カリ入試(2024年度実施から)の詳細は、2022年度初頭に発表。

#### 

本記事にまとめた内容は、厳密にはすべて検討段階のものであり、11 月の 2 回目の試行 調査を経て、来年度初頭に正式発表される。

また、検定料の決定は来年度中となった。記述式の導入がどの程度影響するか。ただでさえ英語の外部検定による経済的な負担増が心配されている中、共通テスト自体も検定料が上がる可能性が高い。

# 各科目の「問題作成の方向性」

(記述式については P.3 を参照。以下、国語・数学については一部、記述式の内容も含む)

# ●外国語(英語) ※特に試行調査の方針

- ・試行調査は、「筆記」「リスニング」は均等配点で実施。今後検証。
- ・出題範囲はコミュ英 I・Ⅱ、英語表現 I (現状ママ)。CEFR の A1~B1 相当 。
- ・実際のコミュニケーション場面を重視。

#### <筆記>

- ・「筆記(リーディング)」と表記し、4技能のうち Reading の性格を明確化。
- ・発音、アクセント、語句整序などは出題しない。
- ・テキストの情報を整理する力、構成を理解する力、要約する力などを問う。

# **<リスニング>**

- ・複数の情報を比較して判断する力、議論の要点を把握する力などを問う。
- ・アメリカ英語以外の読み上げも行う (イギリス英語や英語を母語としない話者による)。
- ・試行調査は1回読みと2回読みが混在する構成で実施。今後検証。

## ●国語

- 言語活動の過程を重視。
- ・新たに「実用的な文章」を題材とする。
- ・出題対象となる題材は、近代以降の文章(論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章)、 古典(古文、漢文)。
- ・与えられた情報を正確に読み取り、多面的・多角的な視点から解釈することなどを求める。
- ・分野を越えた題材や、同一分野の複数の題材を組み合わせたりする問題も出題。
- ・マーク式の成績は、現古漢全体の素点での提供を原則(大問別での提供も検討)。

#### ●数学(IA、IB)

- ・問題解決の過程を重視 (日常の事象に対する数学的な問題解決など)。
- ・事象から数学的な問題を見出す/構想・見通しを立てる/数・式、図、表、グラフ等を活用する/解決過程を振り返り、得られた結果の意味づけや、活用することなどを求める。
- ・教科書で扱われていない数学の定理を、既知の知識を活用して導くような問題も出題。

## ●地理 B

- ・多面的・多角的に考察する過程を重視。
- ・空間的な規則性を分析して地域性を捉えることや、地域の課題を理解し、将来像について 構想していくことなどを求める。
- ・系統地理と地誌の両分野からのアプローチした問題も含む。

# ●世界史 B、日本史 B

- ・多面的・多角的に考察する過程を重視。
- ・用語の知識ではなく、事象の意義、相互の関連などについての理解を求める。
- ・教科書で扱われていない初見の資料を扱うこともある (既知の知識を活用して考察)。
- ・時代や地域によらない「歴史の見方」のようなテーマを設定した問題、時間軸を長く取った時代を貫く問題なども含む。

#### ●現代社会

- ・現代社会の課題や、人間の生き方などについて多面的・多角的に考察する過程を重視。
- ・概念や理論を社会的事象に適用して考察する問題や、各種の統計などに対してさまざまな 立場から考察する問題などを出題。

#### ●倫理

- ・倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視。
- ・資料を読み解き、先哲の基本的な考え方等を手掛かりに考察することを求める。
- ・倫理的な考え方を働かせて思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料や芸術 作品などの資料を手掛かりとして、さまざまな立場から考察する問題などを含む。

# ●政治·経済

- ・現代における政治、経済、国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視。
- ・社会的事象や、各種統計などの資料に対し、概念や理論を活用して考察することや、さま ざまな立場から考察することを求める。

## ●物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎

- ・日常生活の現象に対して、科学的な概念や原理・法則を用いて理解・考察・探究する過程 を重視。
- ・自然現象の中から本質的な情報を見出し、考察・推論することを求める。
- ・仮説を検証する過程で、数的処理を伴う思考力等を求める問題なども含む。

#### ●物理、化学、生物、地学

- ・科学的な探究の過程を重視。
- ・自然現象の中から本質的な情報を見出し、考察・推論することを求める。
- ・教科書等では扱われていない資料を扱った思考力等を問う問題や、仮説を検証する過程 で、数的処理を伴う思考力等を求める問題なども含む。
- ・各科目で設定していた大問の選択問題は廃止の予定(全問必答)。

#### 

高校現場では思考力系(思考力・判断力・表現力)の問題への対応が重要になる。注意したいのは「考える問題なら何でもアリ」ではない、ということだ。

今回示された問題作成の方向性からは、特に各教科で共通して求められる能力として「多面的・多角的に考察する能力」や「実際の現象に対して概念や法則を用いて考察する能力」が挙げられる。

こうした能力はどのような問題で問われるのか。問題の形式については、すでにこれまで発表された文科省や大学入試センターの資料に見ることができる。主なものは以下の 3 タイプだ (「〜型」のネーミングは旺文社)。

- (a)「資料読解型」の問題 … 資料から必要な情報を抽出、比較、組み合わせる問題。
- (b) 「問題解決型」の問題 … 日常生活の課題を解決する問題。
- (c)「対話場面型」の問題 … グループワークや議論の場面などを再現した問題。

例えば国語の問題で、街づくりに関する複数の資料をもとに議論している場面で、それぞれの主張を対比しながら考察する問題だとすれば、(a)(b)(c)のすべてに該当、かつ「多面的・ 多角的に考察する能力」を見る問題といえよう。

また、国語は「実用的な文章」(取扱説明書、報告書、提案書、契約書、法令、公文書など)への対応が必要だし、英語は外部検定に注目が集まりがちだが、共通テストの筆記も読解中心へ大きく舵を切る。要約などの訓練が必要になってこよう。Reading と Listening の均等配点が検討されている点も気になるところだ。少なくともこれまでのセンター対策と大きく異なってくる。

今回の発表は、共通テスト本番に関する内容なのか、本年 11 月の試行調査に関する内容なのか明確に区別はされていない。ただしそもそも今度の試行調査が、本番を想定したものであることを考えれば、両者はイコールに近く、どちらの内容なのかを区別する必要はそもそもない。いずれにしても試行調査で検証し、来年度初頭には最終的な決定をする予定だ。

(2018.09 石井)